

武蔵野日曜集会

活ける水

――ヨハネ伝第7章37～53節――

1984年7月1日(武蔵野)

小池辰雄

我に來りて飲め 聖靈の水を飲め 靈的現実 神の中で 水と靈 キリストは活水 汝生き給う、ゆえに我生く 今ここに

【ヨハネ7・37～53】

37 祭の終の大なる日にイエス立ちて呼わりて言いたもう『人もし渴かば我に來りて飲め。38 我を信する者は、聖書に云えるごとく、その腹より活ける水、川となりて流れ出づべし』39 これは彼を信する者の受けんとする聖靈を指して言い給いしなり。イエス未だ栄光を受け給わざれば、御靈いまだ降らざりしなり。40 此等の言をききて群衆のうちの或人は『これ真にかの預言者なり』といい、41 或人は『これキリストなり』と言い、又ある人は『キリスト争でガリラヤより出でんや、42 聖書にキリストはダビデの裔またダビデの居りし村ベツレヘムより出づと云えるならずや』と言う。43 斯くイエスの事によりて、群衆のうちに紛争おこりたり。44 その中には、イエスを捕えんと欲する者もありしが、手出する者なかりき。

45 而して下役ども、祭司長・パリサイ人らの許に歸りたれば、彼ら問う『なに故かれを曳き來らぬか』46 下役ども答う『この人の語ることく語りし人は未だなし』47 パリサイ人等これに答う『なんじらも惑わされしか、48 司たち又はパリサイ人のうちに一人だに彼を信ぜし者ありや、49 律法を知らぬこの群衆は詛われたる者なり』50 彼等のうちの一人にて曩にイエスの許に來りしニコデモ言う、51 『われらの律法は先その人に聴き、その為すところを知るにあらずば、審く事をせんや』52 かれら答えて言う『なんじもガリラヤより出でしか、查べ見よ、預言者はガリラヤより起こる事なし』53 斯ておのおの己が家に歸れり。

●我に來りて飲め

37 祭の終の大なる日にイエス立ちて呼わりて言いたもう

「祭」は「仮庵の祭」です。一週間くらいやるわけです。「呼ばわりて言う」というのだから、



大きな声で言われたんだね。

『人もし渴かば我に來りて飲め。』

旧約では、祭司は――レビ記23章に書いてありますけれども――毎日、黄金の水瓶に例のシロアムの池へ行つて水を汲んで、これを祭壇に注ぐということをやる。これはイスラエルが荒野の旅をして、モーセが岩を打つて、そこから水が出てきたという、そういった荒野における水の渴きをいやしてくださった恩寵を記念して、祭司のやる業なんです。コリント前書10章でパウロが非常に大胆に言っているでしょ。

「兄弟よ、我なんじらが之を知らぬを好まず。即ち我らの先祖はみな雲の下にあり、

出エジプトのことです。「海」とは紅海です。出エジプト記14章。

みな海をとおり、²みな雲と海とにてバプテスマを受けてモーセにつけり。

おもしろいね、「バプテスマを受けた」と言っている。

³而して皆おなじく霊なる食物を食し、

けれども、彼らは本当は霊のことは分かってないんだけれども。

⁴みな同じく霊なる飲物を飲めり。これ彼らに随^{したが}いし霊なる岩より飲みたるなり、その岩は即ちキリストなりき。」(コリント前10・1～4)

と。大変なことです。パウロは完全にキリストの光で旧約を見ているから、こういう言い方をする。彼らはそんな霊なんてことは、御霊のことは分かっている。不平ばかり言っているんですから。岩から水が湧き出でたのは、実はあれはキリストが飲ましてくれたんだと言う。

「人もし渴かば我に來りて飲め」

とキリストが言われたけれども、実はみんな渴いているのを知らないでいるわけだな。

他のもので、サイダーだビールだコーラだなんて言つて、渴きをいやしているけれども、それは一時的には結構です。けれども、本当に渴いているときにはやっぱり真清水が最高です。本当に喉が渴いているときには、人間の作つたどんな飲物もダメ。これは水に限る。天然水に。無色でいゆる味が無い。ところが、これが非常な味を持っている。そこにも真理がある。私たちはいろいろな文化文明で心の渴きが満足しているけれども、いざとなると、それはダメなんだ。いろんなことにでつくわして、精神的にも肉体的にも、いざとなったら、どうにもいかん。どんなに素晴らしい文化文明の現象であろうとも、その一番元のところに来ないことにはダメなんだ。だから、申し上げているとおり、この福音の世界はキリストの生命の、

「我は真理なり」

という、キリストという活ける真理、活ける生命、本当の生命の世界です。だから、「お前たちは渴いていないような顔しているけれども、本当は渴いているんだ」



ということなんです、「もし、渴かば」なんて言っただけ。聖書はそういう読み方をしているかと、響いてこない。

『もし渴かば』なんて、いつ渴くだろうかな

なんて、冗談じゃないよ。キリストの言葉にも、ヘタすると躓くから。

「主さま、私は渴いています」

と、詩篇42篇のように。

「谷川の水を求めていく鹿の如くあなたという源泉に飲まなくては、この渴きは癒えません」

と。これはヨハネ伝4章でキリストが仰っているとおりです。

「他の水を飲んだって、ヤコブの水を飲んだってダメだよ。私が与える水を飲まなければ、渴きはなおらないよ」

というわけです。

●聖霊の水を飲め

「¹³イエス答えて言い給う『すべて此の水をのむ者は、また渴かん。¹⁴然れど我があたうる水を飲む者は、永遠に渴くことなし。わが与うる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし』」(ヨハネ4・13～14)

と。「わが与うる水」は正に今日やるところで、キリストがはつきり言っただけ。

³⁸我を信ずる者は、聖書に云えるごとく、その腹より活ける水、川となりて流れ出づべし』

「聖書に云えるごとく」とはこのヨハネ伝ではないですよ、出エジプト記17章です。

「イスラエルの子孫の会衆エホバの命にしたがいて皆シンの曠野を立ち出で旅路をかさねてレビデムに幕張せしが民の飲む水あらざりき。²ここをもて民モーセと争いて言う、我等に水をあたえて飲ましめよ。モーセかれらに言いは、汝ら何ぞ我とあらそうや何ぞエホバを試むるや。³彼処にて民水に渴き民モーセにむかいて呟き言う、汝などて我等をエジプトより導きいだして我等とわれらの子女とわれらの家畜を渴きに死なしめんとするや。⁴ここに於てモーセ、エホバに呼ばわり言う、我この民に何をなすべきや彼らは殆ど我を石にて撃たんとするなり。⁵エホバ、モーセに言いたまいけるは汝民の前に進み民の中の或る長老等を伴いかの汝が河を撃ちし杖を手に執りて往けよ。⁶視よ我そこにて汝の前にあたりてホレブの磐の上に立たん。汝磐を撃つべし、然せば其より水出でん。民これを飲むべし。モーセすなわちイスラエルの長老等の前にてかくおこなえり。⁷かくて彼その処の名をマッサと呼び又メリバと呼べり。こはイスラエルの子孫の争いしに由り又そのエホバはわれら



の中に在^{いま}すや否やと言いてエホバを試みしに由るなり。」(出エジプト記17・1
57)

「マツサ」「メリバ」というのは、「争い」「試み」という字です。これがさつきパウロが「岩を撃つたら霊の水が出てきた」と言ったのはこのことです。

³⁹これは彼を信する者の受けんとする聖霊を指して言い給いしなり。

ここでちゃんと説明してしまった。「人もし渴かば我に來りて飲め」というのは、

「魂が渴いているから聖霊を、聖霊の水を飲め」

というわけです。聖霊は、「火」と言ったり、「水」と言ったりするわけですから。

イエス未だ栄光を受け給わざれば、御霊いまだ降らざりしなり。

これは原文では、ただ

「御霊いまだし」

と書いてある。どういふことかという、

「栄光を受け給わざれば」

というのは、キリストは十字架を通つて復活して、そして天界に昇天するということが「栄光を受ける」ということです。十字架・復活・昇天という栄光の道がまだ来てないんです。キリストは。だから、御霊は未だそこにはなかった。キリストにはもちろんありますよ。けれども、みんなには御霊は来なかつたということです。キリストは、聖霊はあの聖霊降臨のときでなければ与えない。十字架を通つて復活して昇天してから、それから聖霊をくだしたもうたのだから。

●霊的現実

聖書の読み方と言つたつて、そういう霊的な現実を――私に言わせれば、「事実」よりも「霊的現実」と言う。単なる外側の事実ではない――その事実を本当に見るといふことは、霊眼をもつてその事実の奥の根源の現実を見るところにならなければ。そうしたらば、我々は普通の人があるものを見るより遙かに本当のところを見ることになる。洞察することができる。ゲーテなんていう詩人はそういう眼を持っていた。

こないだ、「カイロス」の話をしました、全く御霊を受けることが決定的なカイロスです。それも聖霊の世界でものを言っているその響きを本当に受けとつていけば、聖書の読みや祈りの力が違つてくるわけです。

⁴⁰此等の言をききて群衆のうちの或人は『これ真にかの預言者なり』といい、
「かの預言者」という言葉はヨハネ伝1章の始めの方にもでてきた。

「²¹また問う『さらば何、エリヤなるか』答う『然らず』問う『かの預言者なるか』答う『いな』(ヨハネ1・21)」

エレミヤのことです。



41 或人は『これキリストなり』と言い、

「キリストなり」という言い方になると、これはちよつと質が違つてしまう。これは旧約で預言しているメシヤだと。

又ある人は『キリスト争でガリラヤより出でんや、⁴² 聖書にキリストはダビ

デの裔^{すえ}またダビデの居りし村ベツレヘムより出づと云えるならずや』と言う。

「ベツレヘムから出る」というのは旧約の中にある。ガリラヤから出るなんてことはないじやないかと。ミカ書5章に、

「²ベテレヘム、エフラタ汝はユダの郡中にて小さき者なり。然れどもイスラエル^{いし}の君となる者汝の中より我がために出づべし。その出づる事は古昔より永遠の日よりなり。……⁴彼はエホバの力に由りその神エホバの名の威光によりて立ちてその群を牧い^や之をして安然に居らしめん。今彼は^{おお}大なる者となりて地の極^{はて}にまでおよばん。」(ミカ5:2～4)

と。「彼」とはメシヤのことです。「ベテレヘム」というのは「パンの家」という意味です。

⁴³ 斯くイエスの事によりて、群衆のうちに紛争^{あらそい}おこりたり。⁴⁴ その中には、イエスを捕えんと欲する者もありしが、手出^{てだし}する者なかりき。

キリストの権威にふれて恐れるわけです。

⁴⁵ 而して下役ども、祭司長・パリサイ人らの許に帰りたれば、彼ら問う『なに故かれを曳^ひき来らぬか』

なぜ、連れて来ないかと。いわゆる衆議所に持つてきて、キリストのことを審こうとする。

⁴⁶ 下役ども答う『この人の語るごとく語りし人は未だなし』

これはびつくりしたな。本当にキリストの言葉は――言葉ばかりではない。行為もそうです――前代未聞、絶対次元から来ている言葉ですから。思想ではないから。キリストは全く神言を、神からの言を語っていた。

「自分は何も言えない」

と言っているんだからね、キリストは。

●神の中で

「神からの」と言うと、何か非常に人間の自主性がなくなるようだけれども、本当の創造はこの「神からの」という角度がなかったら、本当の創造は来ないんです。「神」と言ったつて、観念的に言っているのではない。絶対次元からのものです。要するに、神からの言は聖霊の響きを持つている。こつちから言うと、靈感、インスピレーションだ。「インスパイア」とは霊を注ぎ込むという字です。だから、

「この人の如く語りし者なし」

とは、その通りです。旧約の預言者はもちろん素晴らしい。けれども、預言者もまたキリ



ストにはかなわない。それは

「我と父とは一つなり」

という境地からものを言っているからね。

「神から」と言うけれども、今度は、「神の中で」「キリストの中で」ということ。本当の「聖書を読む」ということは、聖書の中に入って中で読んでいる。「中で読んでいる」という読み方。ドラマを本当の中で読む。そうすると、聖書を読んでいて力が来てしまう。読んでいて力が来なければ、まだ本当の中に入っていないことです。それは自分で分かる。読んでいて力が来ているから、読むことが同時に祈りの世界です。祈って力がなかったら、それは本当の祈りではない。祈りながら力にあずかっていなかったら。ただ「お願い」ではない。力が満ちあふれると、そのうちに異言になってしまったり、霊歌になってしまいうわけだよな。

「この人の語るごとく語りし人は未だなし」

というこの告白は本当に素晴らしい。本当に次元の違ったものを感じたわけです。これは未曾有だと。弁舌術でもない、雄弁でもない、何でもない。もう質が違う、次元が違う、というわけです。

47 パリサイ人等^{びと}これに答う『なんじらも惑わされしか、⁴⁸ 司たち又はパリサ

イ人のうちに一人だに彼を信ぜし者ありや、

「そんなことを言うのは、お前たちもちよつとおかしいぞ、そんなものを信じている者はないじゃないか、そんなものをなぜ驚いているか」

なんていうわけで、いよいよバカにしているわけだ。

49 律法を知らぬこの群衆は詛^{のろ}われたる者なり』

「とんでもない。まやかしものにまやかさるな」

なんていうわけだ。どっちがまやかしか。「律法を知らぬ」なんて、彼らは律法を外から知っている。ところが、律法を内から知っているのはキリストなんだ。モーセの律法以上にモーセの律法をつかんでいる。モーセ以上の世界を持っているから、キリストの山上の大告白にモーセの十誡はとてまかなわれない。マタイ伝5章から7章。あんなところは暗記してごらんさいよ。電車の中で何回でも読んでごらんさい。身につくまで。この福音の世界はそういうバカげたようなことをするような人にならないとダメ。尋常なことではダメです。

「律法を知らぬこの群衆は詛^{のろ}われたる者なり」

なんて、何を言っているか。そういつた、律法を知らない普通の人のことを「アム・ハ・アーレッツ」「地の民」なんていう言い方をする。

●水と霊

50 彼等のうちの一人にて曩^{さき}にイエスの許に來りしニコデモ言う、



これは少し分かつている。キリストの所に夜やってきて問答した。ヨハネ伝3章のところ。ニコデモはキリストに少し参っているわけです。けれども、もちろん分かつていない。

「ここにパリサイ人にて名をニコデモという人あり、ユダヤ人の宰なり。」

2 夜イエスの許に來りて言う『ラビ、我らは汝の神より來る師なるを知る。

神もし偕に在さずば、汝が行うこれらの徴は誰もなし能わぬなり』

なんてことをニコデモは言っている。

3 イエス答えて言い給う『まことに誠に汝に告ぐ、人あらたに生まれずば、神の国を見ること能わず』

と。「お前はまだ新たに生まれてないぞ」と、やつつけられているわけです。そうしたら、

4 ニコデモ言う『人はや老いぬれば、争で生まるる事を得んや、再び母の胎に入りて生まるることを得んや』

なんて、バカなことを言っている。

5 イエス答え給う『まことに誠に汝に告ぐ、人は水と霊とによりて生まれずば、神の国に入ること能わず。』(ヨハネ3:1～5)

「水と霊」とここにも書いてある。これは立ち歸りの悔い改めの水と聖霊のバプテスマを言っておられる。この場合の水は聖霊ではないですから。あるいは、本当は「霊なる水」と言ったって構わない。

51 『われらの律法は先^{まず}その人に聴き、その為すところを知るにあらずば、審く事をせんや』

その人に聴いて、その為すところを知らなければ、どうして審くことができるかと。とんでもない。これは大変な人なんだと。

52 かから答えて言う『なんじもガリラヤより出でしか、查^{しら}べ見よ、預言者はガリラヤより起こる事なし』

なんて言って、またニコデモをやっつけようとした。よっぽどバカにされているんだ、この「ガリラヤ人」というのは。ヨナはガリラヤから出ているんです。

53 斯ておのおの己が家に歸れり。

と。まあそういうわけですね。

●キリストは活水

今日は「活ける水」という題です。さつきから時々触れてはいるんですけども。水は無色無味。天然の水は色もなければ味もない。「ああ、水はおいしい」という。味が無いのがおいしい。何も色が着いてない。ところが、水は太陽の光を受けると、無限の色を持っている。無色が無限の色を持つ。無限色。水が本当は味の素だ。手を洗うのも水でなければダメ。これは清める。浄化する。まあ天然の水そのものを我々がいろいろ思っても――



そして、空気、気と水――これは人間には絶対に必要なものだ。人間の構成している90何パーセントが水だと言うんでしょ。骨も壺に入れて空中にさらしておくとか、水に変わってしまう。地水火風、「四大」と言ってますね。地は一切のものを担う。一切のものを呑み込んでしまう。それから不思議なのは海の水だよ。あれはなぜ塩があるのか、誰に聞いてもわからないんだ。どうして、海の水はあんなに塩辛いんですかと。それは事実、塩水だけれども、どうしてとなると分からなくなってしまう。神さまの創造の世界というものは大変なものだな。自然界を見ても神秘に満ちている。動物を見ても植物を見ても。しかも、動物にしる植物しる全部、水がなかったらどうにもならない。水というのは生命の元素だね。

キリストは活水である。あるいは活泉、活ける泉と言ってもいい。生きかつ生かすもの、在りて在らしめるもの。みんなそうです。作用するんです。作用するものでなければ本当の生命ではない。相手に作用する。相手を生かす。別な言葉でいうと、すべてそれが愛の現象なんです。我々は、キリストという聖霊をくださるところの活ける水の源泉でもって、本当に祈りの世界で魂が生きるでしょ。生き生きとしてくる。水々しくなる。そうすると、実は魂も体も、何だかしらないけれども、元気が出てくる。

キリストという源泉は、いつもどこでも、いついかなるところにおいても、このキリストの源泉は飲めるんです。自然界の水は、そういった素晴らしい水はそう簡単ではない。都会ではみんな浄化して、水道の水は飲んでいるんだけど。田舎へ行つて山の中に行かないと、いきなり飲める水というのはなくなってしまった。ところが、ありがたいことにキリストという水は、霊水はいつでも飲める。電車の中でもどこでも。

●汝生き給う、ゆえに我生く

この秘訣を本当に知らなければ、信仰なんて言っただって、つまらんですよ。

「何が信仰か、キリストが神の子だということを信じたって何になるか。実際、その源泉から飲まないでいて、何が信仰か」

と言いたい。「信仰」という言葉が私はだんだん嫌いになってきた。「信仰」なんて言う必要は何もない。「その現実生きろ」ということ。我々は今という活ける現実にいるというのが信仰の現実なんです。「信仰」という言葉ではもう足りない。生きているということ。

「私は生きています」

と、はつきりそれが言えればもうそれでいい。「信じている」もへったくれもない。私は生きてますと。

「キリスト、汝生き給う。ゆえに我生く」

と。「我思う。ゆえに我在り」ではない。

「汝生き給う。ゆえに我生く」

です。「汝生き給う」ということは、生かす汝だから。「キリストは生き給う」ことは「生か



し給う」ということ。だから、私は生きていますと。そして今度は逆に、必ず人を生かしますと。これが愛の内容です。いかなる瞬間も、

「キリスト、汝生き給う。ゆえに我生く」

と、これがはつきりと言えなくてはいいかん。恩寵の現実の中にスツと入れる。祈りはなにも理屈ではないですから。沈黙の祈りでパツと入ってしまう。いいですよ、そんな一足飛びでなくたって。だんだんそういうようになってください。

● 今ここに

特に今日のところはヨハネ伝4章と非常に関係しているところだから、4章のサマリヤの女との会話のところは本当に大事なところですよ。この前は火の話をしたけれども、今度は本当に水のこと、ことに夏は我々は非常に水を欲しくなるわけだ。体が水を欲しくなったら、魂はキリストという水を欲しくならなかったら、おかしい話だ。そしたら、どんな現実も――いいですか、みんないろんなことでうまくないことがあるよな、けれども――常識を乗り越えて、もうひとつ奥の世界に入って、絶望はない。どんな行き詰まりも、どんな肉体的な欠陥も、絶望はない。死人をも甦らせたキリストですから。

もうそういうキリストに本当に自分を投げ入れてくださいよ。そして、すること、勉強のことであろうと、芸術のことであろうと、医術的なことであろうと、手仕事のなことであろうと、何であろうと、キリストという源泉は一切の力の元です。

日本には熱泉が、温泉がたくさん出ている。あれは温泉じゃない、本当は熱泉なんだ。しばらく引いてくると温泉になるんだけど。元はみな熱いんだ。だから、あのラウデキヤか、

「熱くもなく冷たくもなく、生ぬるいのはごめんだ」

と言われた。ラウデキヤという所は地勢の関係で温泉から流れてくると微温になっている。だから、ああいうことを言っている。微温温泉みたいでダメだという。源泉はキリストの熱泉であると同時にまた真清水でもあるというわけだ。

この聖書の具体的な御言は自分の生活の現実でこれを力としなかったら、聖書を読むなんて言ったって、つまらないですから。聖書というものと生活がバラバラになつてはダメなんです。

「私は聖書を生きています」

という生き方。特に福音書の中で、「これは」というような言葉をしっかりとつかまえてください。余計な言葉はたくさんあるんだから。そして、「これは」という言葉は抜き書きでもしておいて、そういうカードを作っておいてもわるくはない。それをポケットに入れておく。あなた方、何でも工夫してくださいよ――そうすると、試験勉強みたいだ――神さまの入学試験は普通の試験勉強と違うんだ。身につけているようなつかみ方をしないとね。

「お前は地上の入学試験は及第したけれども、どっこい、神さまの入学試験には落



第だ

なんていうのでは困るから。

パウロは旧約を読んでも、

「あの岩はキリストだ」

なんていう言い方をするわけです。ずいぶん乱暴な話ですよ。モーセも知らないことを、感じないことをパウロはキリストの光で見ってしまう。黙示録に、

「^{いま}今在し、昔在し、のち来り給う者」

とある。一番先に「今在し」と書いてある。「今ここに」という。本当に今を生きている人は、

「キリスト今生き給う、ゆえに我生く」

と言う。そういう人は昔を生かすんです、今度は。どんな経験も、どんなマイナスの経験も全部、プラスに変えて生かしてしまう。

「ああ、失敗した。あんなことはしなければ良かった」

ではない。いいんだよ、失敗して。その失敗が逆に、今の素晴らしいものの逆の踏み台になつていたということ。「のちを来らせる」という、将来の完成の現実を今の中に入れてしまふんです。だから、さつき言った、質的には未、完成の完成、というわけです。

信仰の現実とは、「今生きる」という「今」ということがいかに大事かということです。今、ここにおいて。どこでも、「今ここに」という世界です。そうしたら、俄然もの凄い力がある。歌を歌うのも、今という瞬間にキリストの中に入って歌ったら、もう霊歌的な質が、いまだかつてないような声になってしまう。それが未来を引きつけ、今までの経験を本当に生かしてしまう。これが「永遠の今」ということ。不滅の今なんです。これが「一日千年」という今。これが本当に生きているということ。そういう生命力を持っていると、それを人にわかたざるを得なくなる。何とかしてこの世界に入れてあげましょうと、働くわけです。在りて在らしめるもの。神・キリストによつて在りて在らしめられると、今度は人を在りて在らしめる人になっていく。これが皆さんが身をもってする伝道なんです。遠慮はいらんですよ。遠慮していたら、体裁を考えていたらダメですよ。本ものは必ず何か響くんです。「あいつはだいたい変わっているが、何かちがうなあ」と。それをやつていかなかったらダメです。

いよいよもつてキリストの霊を本当に受けて、そういったものの凄い、質的に霊的な人間にならなければダメです。もういい加減なキリスト教では大体、もたないです。だから、

「パウロたちのこの使徒的現実に入れ。聖書の現実^{なまやさ}は生易しい現実ではありません」

と言うわけです。絶対です、本当に。私は何と言われようと、一向に差し支えない。もうキリストの世界にこのようにして入れられてしまっている。本当は、私はもう異言^{イコノミヤ}でものを言いたくなるんですけれども、こらえている。そういう、腹より活ける水が湧き出でて、そして作用する。おしまい。

